

幼児の感情(一)

佐藤満寿美



ある瞬間の、限られた空間をとらえた、無彩色の一枚の写真を見ると、そこで目に映るものは非常に限られています。しかし、写真にあらわれた子どもたちのさまざまな表情をじっと見ているうちに、ひとりひとりのそのときの感情がとらえられ、画面からは、遊びのようすが伝わり、声さえも聞こえてくるような気がします。おそらく多くの方が、子どもたちの表情を読みとられ、多少の差異はありましようが、場面を想像されることと思います。自身が、さまざまな感情のおりなす絢の中で、経験をつんでいるからこそ、子どもたちの表情を見ても、そこでの経験を想像できるのでと思います。

幼稚園では、子どもたちが、そこで接するものとか、先生、友だちの中で活動するうちに、いろいろのことを経験し、学んでいます。確かに子どもたちは、何かを経験し、学習しています。が、そのとき、そこで、子どもの内側に、どんなことが起こり、何が活動を促進したり、阻止したりさせているのかということを考えることも必要と思います。ここでは、子どもの内側のこととして、特に、感情をとりあげようと思います。

発展につながる教育の論議は望ましく、必要なことですが、往々にして、そのテクニクばかりが問題になり、受ける側のこ

と、子どもの側のことが無視されがちです。子どもの本質を知ろうとすることは、子どもの感情をとらえようとする態度に通じると思われます。

幼児の感情を考えるにあたり、感情をどのようなものとしてみるか、子どもの感情をどのようにしてとらえるか、感情と経験や学習の関係をどうみるかを簡単に述べてみます。

「感情は、表現させるためにある。感情は、われわれの見方に、特別な大きさを与え、われわれの認知を、直接意味あるものにし、われわれの経験に、高さと深さを加える。感情は、涙と笑いの原料となり、われわれの伝えあいに、あるリズムを与え、言葉に意味をそえてくれる」とリップル (Lippel, E.) が述べています。

私はここでこのような広い意味での感情をとらえ、日常使っている感情表現の語句と思われるものを用い、子どもが、そのとき、そこで、どう感じているかを明らかにしようと思えます。また、子どもの感情は、おとなに比較した場合、未分化で理解しやすいと思われます。そこで「子どもたちは、行動を通して自分たちの感情を示していく。子どもたちは、直接的に行動し、感じた通り行動に移す。だから、まず子どもの行動を観察することから

はじめよ」とするリード (Read, K. H.) の考えを受け入れ、幼稚園における子どもの全般にわたる行動の観察をし、観察眼を養うことから始めようとしています。

子どもをよく観ることは、実践の上でも、研究の上でも、重要なことであるということは、多くの方が言われていますが、私も痛感いたします。観察を通して明らかになることが多くあるのです。子どもの真の理解は、子どもと物理的にも、精神的にも近いところで、心をすまして観るとき可能と思われれます。観察から得たものは、それぞれに意味があり、それぞれの場の中でのみその意味が生氣あるものとなると考えられます。子どもの感情を考えると、このことは特に重要です。場を切りはなし、とり出して並べたてられた感情表現の語句ほど無意味なものはないでしょう。この種の研究では、感情を数値であらわし、統計的に処理しては述べられないと思います。

マーフィー (Murphy, L. B.) らは、「成長の過程には、スキル (skill) や理解の成熟だけでなく、感情の成熟も入っている。そして、感情はスキルや知識の発達のプロセスと共に発達していくものである」と子どもの発達における感情とその中での子どもの活動の密接なことを述べていますが、これらの考えを積極的にとり入れ、子どもの理解を深めようとしています。



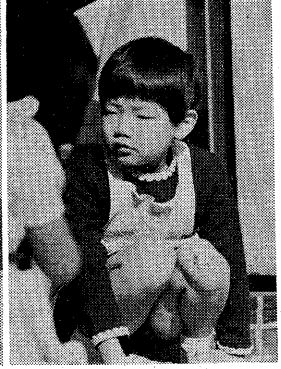
① 友だちの感情を知ろうとする

以上述べた立場をふまえて、半年余り、幼稚園、大学ナースリーグループで行なった観察をもとにして次に述べてみます。

A 子どもどうしの間にみられる感情

(1) 友だちの感情を知ること、自分の感情を知ることにつながる。

①友だちの感情を知ろうとする。子どもは話しかけたり、友だちのやっていることに注視したり、顔



③ 友だちの感情を分け持つ

がいに興味を抱くうちに、言葉によらなくとも、次第に友だちの気持を察することができるようになってくる。自分自身の気持を知ることができれば、友だちの

② 自己認識の機会を得る

をのぞきこんで表情を見ることによつて、友だちの言おうとしていることや、やろうとしていることを理解しようとする。

②自己認識の機会を得る。
友だちの気持がわかった喜びや、友だちと自分との感じのち

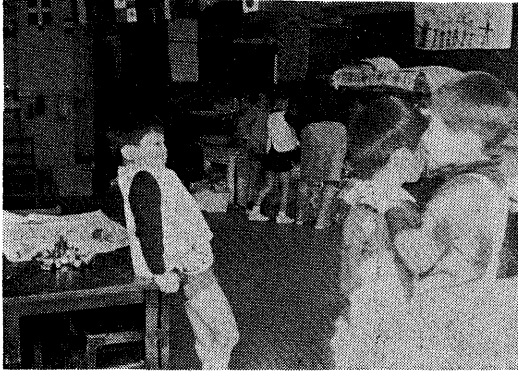
気持は一層理解しやすい。

③友だちの感情を分け持つことができる。

(2) 子どもは、感情をコントロールできる。

①友だちとの間で、自分自身の感情をコントロールできる。

快、不快などの感情を泣いたり、笑ったりすることにより端的に表わす赤ちゃんに比べると幼児は、経験の積重ねにより、自分自身の感情をコントロールできるようになる。



(写真④の説明)

↑C AはBの協力を得て大きなキリンを作っている

↑B た。ほほできあがり、二人で喜びを分かちあっているところへ、Aの製作を快く思っていない

↑A て、Bに耳うちし、味方ひき入れ、Aを孤立させた。Aは黙って仕打ちに耐えた。その

後Aは近くにいた子どもと遊びだした。

ここでは、楽しくやっていた仲間をとられた子どもが、孤立した寂しさや悲しさ、楽しさをうばわれたくやしさを友だちへの攻撃へはむけず、泣くこともせず、黙って耐え、遊びを始めることで、自分の感情をコントロールした。

すべての子どもが、いつも感情をコントロールできるわけではない。今できた子どもも他の場面ではできないかもしれない。既に忍耐の経験があつて、そこで成就感のような気持ちを味わっていれば、それが次での忍耐をさらに容易なものにしていく。

②友だちの感情をコントロールできる。子どもは、自分以外の友だちの抗争を解決するような機会を得ることによって、友だちの感情を理解し、コントロールすることができるようになる。

(例)

二人の子どもが一つの自動車を取りあいしているのを見つけた子どもは、すぐに二人の表情を読みとり、ころがっていた他の自動車をもってきて黙って一方の子どもに手わたした。新しくもってこられた自動車で満足した子どもはどおりあいをやめた。二人の子どもは、何事もなかったかのように、

それぞれの自動車で遊びだした。(3歳児)

とりあいを解決した子どもは、二人のどうしても手離したくない気持、自分のものとしたい気持を察し、しかも、円満な解決策を講じた。おそらく、この子どもは、これに似た場面に、自らかあるいは傍観者として遭遇したことがあり、おとなのやる解決策を経験し、知っていたのだろう。この体験が、この種の次での態度に自信を増すきっかけとなる。他人の気持を理解し、解決してやろうとする行動につながる。

(3) 友だち関係を強める同情や共感。

① 友だちを同情する気持は、友情関係を強める。

相手の気持を理解することによって同情が生まれる。一つの同情が行為を生み、その行為によって得たうれしい気持が印象となって相手に、親しみの感情をもって行動させる。瞬間に抱く感情は、ある行動をとらせ、その行動によってまた新たな感情が生まれる。これが子どもたちの間である方向をもって循環するとき、強い友情関係となる。

(例)

三歳のN子は、バスケット入れのたなに、自分の入れ場が見あたらなくなつたとき、さがすこともせずに泣きだした。

それを見ていたEは、N子が泣いたということから同情する気持を起こした。昼食になり「バスケットを取りに行つてもいい」と先生がいうと、EはN子より一足先にバスケットをとりに行き、N子に無事に手わたした。その後、二人の間の接触はなかったが、帰園の際、Eが上着のボタンをとめるのに熱中し、わきにはさんでいた帽子を落とした。これをN子が見つけ、そばによってきて帽子をひろい、ほほ笑みながら手わたした。



⑤ 共感の喜びは友だち間を密接にする

(4)

- ② 友だちと共感する喜びは、友だち間を密接なものにしていく。
- 友だちと協調協力できると同時に対立も生じる。



⑥ 友だちと協調協力できると同時に



⑥ 対立も生じる



⑦ 友だちからの注目と賞賛は自信をつける

多くの場合、物が媒体となるのだが、ある感情、ある行為をきっかけにして、協調できる関係、協力できる関係を生んだり、排他的、対立的な関係を生む。子どもは、おとなどうしのかかわりあいよりも、感情の表現が率直で未熟なため、関係がかわりやすく見える。予期せぬとき、思いがけないきっかけが、関係を密にしたり、排他的にする。他人と協調したい気持、排斥したい気持、その排他的な気持をおさえて協調しなければならぬと思う気持を同時にもっている。

子どもは、自分の気持を言葉や動作や表情に率直に表わすが、自分でも理解できないような複雑な気持を抱き、行動に表わし得ないような場合もある。

(5) 友だちからの注目、賞賛と批判は、子どもの活動に影響を与える。

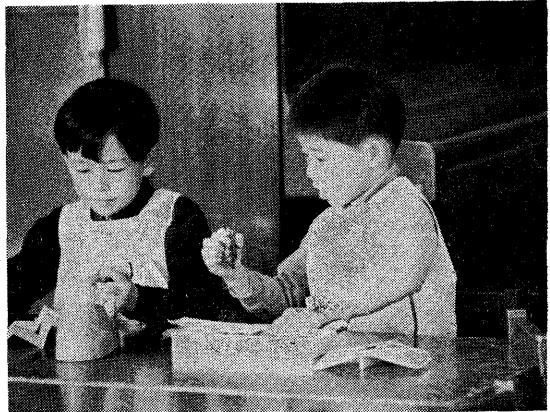
① 友だちからの注目と賞賛は自信ある活動へつながる。
子どもは、常に他人から認められていたいという欲求をもつ



⑧ 自信を得、活動を持続させる



⑨ 友だちがやることを見ることにより自己認識の機会を得る



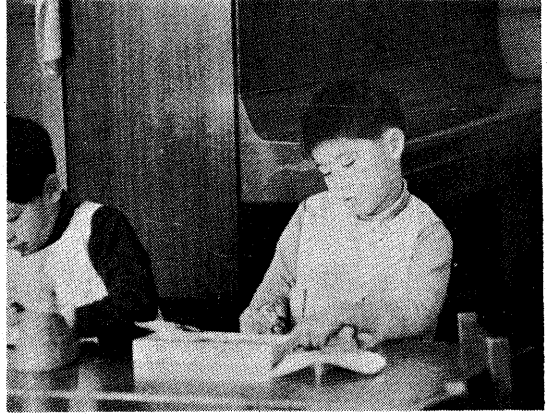
ているが、友だちが自分を見ているのに気づいたとき、友だちが言葉によって励ましたり、賞賛してくれるとき、自信を得、活動を持続したり、さらに表現の意欲をわかせるたりできる。より多くの友だちから見られることは、先への進展のためのより大きな力のもととなる。

② 友だちからの批判

一方、友だちからの批判やさげすみを受けた子どもは、その

瞬間やり場のない不快な、悲しい気持ちになるが、多くの場合、これが刺激となり、闘志をわかせる、次への新たな活動、着想を生む。この経験が、社会的ルール、規範を身につけていく機会にもなる。保育者としては、正しい批判、価値づけが子どもどうしの間でされるよう導く必要がある。

⑥ 同年齢の友だちのやることを見ることは、子どもの活動に無

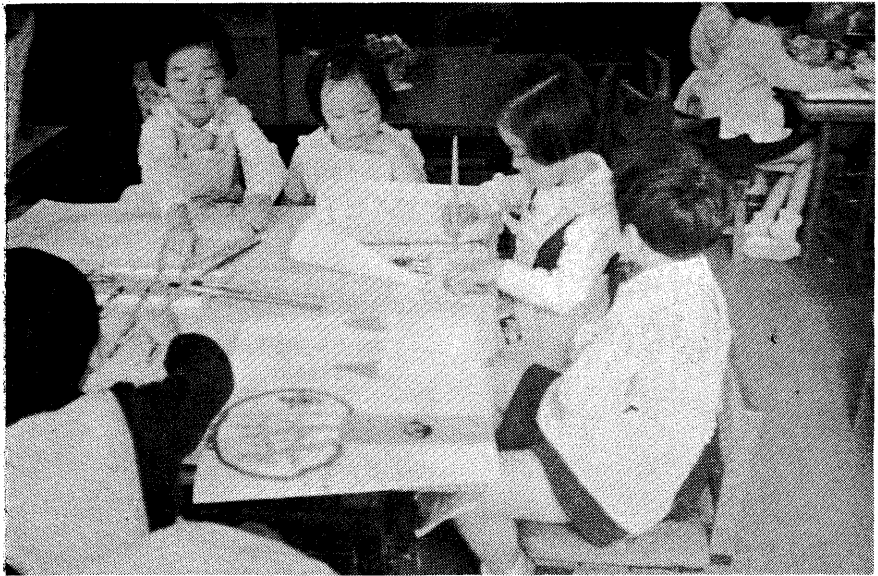


⑩ 友だちのやることを見ることによって、刺激を受ける

理のない、適度な刺激となる。

友だちがやることを見るにより、自己認識の機会を得る。

無理のない、適度な刺激で、発達をうながす感情を刺激する。次にどうしたらよいかわかってくる。友だちの模倣をきっかけにして後に必ずその子らしさが生まれ、独自の製作へのエネルギーも出てくる。



また、自分の順番がまわってくるまで、友だちのやることを見ている期間があるとき、その間に、自分のやりたいこと、表現したいことがまとまってくる。

同年齢の友だちに接し、友だちのやることを見る機会を経験できる幼稚園は、おとなとの接触、年齢差のある人との接触の多い家庭よりも、子どもの発達を無理なく促進できるのではなからうかと思われる。

(お茶の水女子大学)